

選者 川口孤舟

参加者 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ 西澤國護

長谷見びん 星田啓子

投句・選句 今井紀久男 柿崎忠彦 熊谷くにお 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏

田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 福島正明 古川百合子

古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆

早川允章 山本三恵

【互選句】○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十一點 たをやかに老いを生きたし花ゑんど とみ子 (紀・忠・く・健・○孝・龍・康・ゆ・び・允・昇)

十點 一手指す駒の響きや梅真白 孤舟 (紀・く・た・己・國・○允・啓・け・天・盛)

白魚の椀で量られ浜の市 全 (くす・紀・く・五・恵・清・康・び・天・三)

◎友の手を握った夜の別れ霜 盛雄 (くす・紀・忠・孤・五・清・國・隆・百・啓)

八點 釘煮着く兄の筆圧やや弱し とみ子 (くす・紀・忠・千・○堂・百・亜・○三)

天からの遊びの誘ひ名残り雪 忠彦 (紀・孝・○己・堂・ゆ・正・け・○盛)

寄り添ひて住めば都と残る鴨 昇 (くす・忠・健・堂・ゆ・び・允・亜)

七點 花冷の堂の絵硝子十二使徒 とみ子 (そ・紀・千・恵・清・康・昇)

六點 うららかや唄天下の五十年 健介 (紀・く・と・康・己・允)

しなのぢの旧駅舎には春暖炉 とみ子 (紀・清・び・規・け・天)

◎雛壇の婦長に似たる官女かな 堂哉 (紀・孤・健・○正・昇・盛)

◎春雪の一片乗せて長寿眉 康敏 (紀・孤・健・恵・と・堂)

病みし友なにも語らず花吹雪 百合子 (紀・隆・雅・啓・規・三)

◎廃校の百年の桜少年老ゆ 盛雄 (紀・孤・く・雅・國・天)

五點 祖母の帯手になつかしき弥生かな とみ子 (紀・た・雅・啓・亜)

◎幼児は車種をすらすら暖かし 千恵 (孤・健・○と・己・百)

◎夜半の雨何時しか変わりなごり雪 ただしげ (紀・孤・○龍・雅・國)

春疾風 (はやて) 急がぬ道を急 (せ) かすかな 恵洲 (と・千・龍・雅・正)

雛飾り老ひ来し日々を思い出し 雅夫 (そ・紀・忠・た・國)

梅林に色あり風に香りあり 國護 (紀・千・た・孝・ゆ)

四點 釣釜の揺れ収まりて香立つ 五郎太 (紀・己・百・啓)

蕾菜のほのかな辛み春浅し 全 (た・堂・清・百)

声変わりの選手宣誓山笑ふ
鼻と鼻寄せ合ふ子山羊草青む
春の日や皆耳遠し同期会
◎ゆでたての Pasta 彩る春野菜
吾子帰る機影も遙か鳥雲に
時移り事去る故郷蓬餅

健介 (そ・紀・恵・け)
康敏 (そ・清・昇・規)
ゆたか (隆・雅・正・天)
國護 (孤・く・と・○昇)
昇 (紀・龍・百・盛)
盛雄 (○くす・紀・允・正)

三点

蜃気楼竜宮城の立ち上がる
黒土は母のぬくもり春耕す
待つといふ豊かな刻や初音聴く
雨の日の雨の初音となりにけり
雉鳴くや瀉の静寂を切り裂けり
更の靴矯めつ眇めつ朝うらら
暖かに恍惚の母目輝く
懐紙より懐紙に移す雛あられ
吾を見るや鶯の声共に歩す
夜と朝の交じり合ふ空春霞

孤舟 (紀・健・○康)
全 (紀・忠・孝)
全 (紀・び・盛)
くにお (紀・龍・允)
全 (○そ・紀・た)
千恵 (と・己・亜)
正己 (そ・紀・規)
康敏 (紀・恵・盛)
雅夫 (○紀・五・ゆ)
啓子 (龍・孝・け)

二点

ワイン買ひ娘等妻と雛祭り
上着を脱がんと龍天に登る
春昼のバーのマテニイのジンは未知
春霞多摩の流れを遙かにす
雪国の人に別れて花杏
猪除けの柵荒らされし雪間かな
越前の春や廃墟の破碎音
終電の寝息澄みたりおぼろ月
天魚 (あまご) 喰ふ箸の先なる紅き点
野蒜 (のびる) 引きガリリと齧る母のいて
壺焼や全き腸のありてこそ
◎夢なのか蜃気楼見た若き日も
木目彫 (もくめぼり) 小さな雛を仏前に

忠彦 (國・隆)
五郎太 (孝・三)
千恵 (紀・啓)
國護 (康・ゆ)
びん (正・三)
全 (くす・昇)
全 (紀・堂)
百合子 (け・亜)
啓子 (紀・千)
全 (紀・亜)
亜也 (五・恵)
けい子 (孤・五)
天牛 (紀・隆)

一点

◎待春の選抜野球釘付けに
子等のためミニ雛飾る歯医者さん
春一番蛮勇振るいロープウェイ
春一番駐輪場を蹂躪す
初花はもすこし先と花芽かな
若冲発見永の眠りのあとの春
何時までも日陰でそつと残る雪
鳴く声が目覚まし代わり寒鴉
人づてに聞く旧師の訃梅寒く
春の雪犬は喜び駆け回る

紀久男 (孤)
全 (紀)
堂哉 (紀)
全 (規)
千恵 (五)
全 (規)
ただしげ (規)
全 (紀)
恵洲 (紀)
ゆたか (隆)

後輩に問題託し卒業す
 吾が妻の甘き風吹く蓮の花
 亡き妻の風に誘われ蓮の花
 春暖炉いる日いらぬ日繰り返し
 丈なきを集めて鉢の花菜かな
 春月に我が九十の祈りあり
 フレイルの序列のかなた鳥雲に
 朝食のレタスのサラダ歯音良し
 桃始笑（ももはじめてさく）翔平祝ふ空も蒼
 ◎桜散るチルチルミチルの青い鳥
 新幹線敦賀の海に春の雪

正明（千）
 規雄（紀）
 全（紀）
 國護（び）
 亜也（紀）
 びん（紀）
 全（紀）
 全（紀）
 ただしげ（三）
 啓子（紀）
 百合子（孤）
 けい子（天）

【句 評】

十一点句 たをやかに老いを生きたし花ゑんど とみ子

孝岳さん・・・年齢を重ねたら肩肘を張らず泰然と生きたいという気持ちだが、しなやかに蔓を張って伸びている「えんどう豆の花」に託されているようです。共感します。

康敏さん・・・人生百年、優雅に生きたいものだ。豌豆の花の取り合わせが効果的。
 ゆたかさん・・・同感です。

十点句 一手指す駒の響きや梅真白 孤舟

ただしげさん・・・臨場感があつて、駒音が聞こえて来そうな感じがする。
 啓子さん・・・そこにいるすべての人が緊張に息を詰めている中、長考後の一手。季語の取り合わせで厳しい戦いの空気が感じられます。

天牛さん・・・きつと上等な駒でしょう。真白の梅の色がきいていますね。
 盛雄さん・・・将棋の句は久しい。中七、下五が爽やか。

白魚の椀で量られ浜の市 孤舟

五郎太さん・・・見たことがありますね、浜ではそうなのです。
 恵洲さん・・・椀で量られ売られる白魚。浜の市の風情が嬉しい。
 康敏さん・・・「月も朧に白魚の…」と、春を告げる魚だ。鮮度が落ち易いので、浜でお椀に掬って量り売りされている。

天牛さん・・・「白魚を椀で量る」なんて素朴な表現で老人を泣かせますね。

友の手を握った夜の別れ霜 盛雄

孤舟選者・・・友との別れを予感させる握手でないことを祈る。
 五郎太さん・・・長の別れになるのだろうか。春になっても夜はまだ寒い。別れ霜は晩春の季語のようですが、効いています。

隆さん・・・高齢で手を握る行為は、再会の喜びより別れを惜しむ気持ちが強くなる。
 百合子さん・・・胸に沁みました。最近では友と別れる時、しっかりと手を握ります。

八点句 釘煮着く兄の筆圧やや弱し とみ子

千恵さん・・・品物に貼られた配送伝票の字が少しかすれているように見えたことでお兄さん

も年を取ったんだなと感じたのですね。

堂哉さん・・・仲の良い兄弟？ですね。年々、文字が弱々しくなるのは当たり前のことではあります。寂しいものです。

百合子さん・・・故郷の釘煮を毎年送って下さる兄上、筆圧が少し弱くなったようなと氣遣う

妹(弟) 歳を重ねた兄妹(弟)の味わいでしょか・・・

亜也さん・・・身内だからこそ氣付く変化。そこはかとなない氣遣いもいい。

三恵さん・・・遠くに住んでいる兄弟のことが、いつもと違う「頼りない」便りで、きがかりだが、一方で、それは自分の思い過ごしてあつてほしい。それが「やや」弱しなのでしょうか。ここに「釘煮」が効いてくる。日常でふと立ち止まる一瞬の「感性」が好きです。

天からの遊びの誘ひ名残り雪 忠彦

堂哉さん・・・中七にひかれました、淡雪の中でダンスをしたくなる時もありました。

ゆたかさん・・・天からの遊びの誘いの表現が面白いです。

盛雄さん・・・スケールの大きな佳句。どんな遊びでしょうか。

寄り添ひて住めば都と残る鴨 昇

健介さん・・・人も残る鴨も寄り添って住めばハッピーなのでしょか

堂哉さん・・・うちの近所の池にも毎年います！

ゆたかさん・・・ご夫婦のつましやかなご様子が伺えます

亜也さん・・・鴨の氣持ちもよく分かる。もつとも鴨は繁殖の相手を毎年換えるのだとか。

七点句 花冷の堂の絵硝子十二使徒 とみ子

恵洲さん・・・我が散歩コースにある、碑文谷サレジオ教会のステンドグラスを髣髴。季語花冷えが良く似合う。

康敏さん・・・十二使徒の描かれたステンドグラスの美しいチャペル。花冷で厳肅さが増す。

六点句 うららかや嬪天下の五十年 健介

康敏さん・・・尻に敷かれて半世紀、しかし屈辱感はないようだ。「うららか」で円満さが窺える。

しなのぢの旧駅舎には春暖炉 とみ子

天牛さん・・・旧駅舎の暖炉は薪が焚かれているかも知れません。赤々と燃えているのでしょか。

雛壇の婦長に似たる官女かな 堂哉

孤舟選者・・・雛壇の官女は、長らく病院でお世話になった婦長さんのような温和な眼差しをしています。

正明さん・・・お世話になっている病院の婦長さんが雛壇の官女に似ているなんて。

盛雄さん・・・お世話になっている病院の婦長さんに似て良いお顔をされている三人官女。それとも逆に怖いお人でしょうか。

春雪の一片乗せて長寿眉 康敏

孤舟選者・・・百歳の村山富市元首相の眉には、既に真っ白な春雪が載っている。

恵洲さん・・・村山元首相の倅？

堂哉さん・・・老翁の顔が見えます！長年、お目にかかつてはいませんが

病みし友なにも語らず花吹雪 百合子

隆さん……「花吹雪」は友との再会の喜び表現か。

啓子さん……同じ経験があります。窓辺には花びらが白く舞い、別れを予感させました。胸が詰まります。

廃校の百年の桜少年老ゆ

盛雄

孤舟選者……創立百年の学校の歴史を見守ってきた桜の木と老卒業生。

くにおさん……「百年の桜」は「百年桜」でどうでしょうか。

天牛さん……校舎の板ばりの様子までよくわかります。そんな校舎に勉強だ少年もすっかりお爺さんになりました。

五点

祖母の帯手になつかしき弥生かな

とみ子

啓子さん……春のひと日、久しぶりの帯を締める。お祖母様から頂いた帯だ。手に馴れた帯地は柔らかく、お祖母さまのぬくもりまでも伝えてくれます。たをやかな時間。

亜也さん……触感で思い出す日々。

幼児は車種をすらすら暖かし

千恵

孤舟選者……特に三・四歳の男の子は、乗用車の車種や新幹線の型式を一発で言い当てて驚かされる。

とみ子さん……日常のうれしい驚きを、読者に分かりやすく整えられたと感心しました。

百合子さん……まったく同感です。次々と“ボルボ”“アウディ”“ジャガー”“フェラーリ”

等々呪文のように唱えるさまは、驚きでもあり可愛らしくもあり、たまりません。

夜半の雨何時しか変わりなごり雪 ただしげ

孤舟選者……夕方以来しとしと降り続いていた雨が、深夜になって急に大粒の雪片に

変わった。

龍平さん……なんと言う巧まざる自然の妙技の一齣(こま) 嬉しくなり長生きしそうです。

春疾風(はやて) 急がぬ道を急(せ) かすかな 恵洲

とみ子さん……軽味や俳諧味を感じました。

千恵さん……春の強風が吹けば誰でも急ぎ足になります。

雛飾り老ひ来し日々を思い出し

雅夫

ただしげさん……雛飾りを通じて若き日を懐かしんでいる様子を上手く表現している。

※孤舟選者……「老ゆ」が元となるこの言葉は間違えることの多い動詞ですが、これは

ヤ行上二段活用ですので「老い」になります。

※康敏さん……「老ひ」は誤り、新旧仮名とも「老い」が正しい。下五は旧仮名なら

「思ひし」ですね。

梅林に色あり風に香りあり

國護

千恵さん……これといった匂いのない季節に梅の香は際立っていますよね。

ゆたかさん……ハーモニーのきいた調子のいい句です

ただしげさん……梅林の風情を句にリズム感を持たせて気持ちが良い。

紀久男……色あり・香りあり……のリフレインが効いている。

四点

釣釜の揺れ収まりて香立つ

五郎太

百合子さん……静謐な茶室の光景がありありと目に浮かびます。

菘菜のほのかな辛み春浅し

五郎太

堂哉さん・・・中七に一工夫欲しいかな？とは思いますが、春を呼ぶ菘菜で頂きました。ただしげさん・菘菜通じて春の到来を感じさせる。

百合子さん・・・春先の辛み苦みの野菜を天ぷらにする楽しみ、まさに日本の味覚！

声変わりの選手宣誓山笑ふ

健介

恵洲さん・・・少年と青年の移り目の若者の青春譜。いいね。

※康敏さん・・・下五の季語が旧仮名なので、上五も「声変はりの」と旧仮名にすべきでは。春の日や皆耳遠し同期会

ゆたか

隆さん・・・高齢の同期会は談笑といっても聞こえず成立せず。会うだけで嬉しい。

天牛さん・・・何年入社かわかりませんが、青葉会の皆さんも、そろそろ老境に入ったのでしようか。

◎ゆでたての Pasta 彩る春野菜

國護

孤舟選者・・・露・たけのこ・たらの芽ほか彩とりどりの旬の野菜を絡めた Pasta が茹で上がった。

昇さん・・・春野菜 Pasta は彩り豊かで誠に美味しそう。食欲をそそります。

吾子帰る機影も遙か鳥雲に

昇

龍平さん・・・東京勤務初孫 お正月早々の羽田着 Boeing 機にて帰任せり。ヤレヤレ。

百合子さん・・・機影が雲にまぎれて見えなくなるまで佇んで見送るその心情、ありがたくも切ない。

盛雄さん・・・遠隔地からか、海外からか久し振りに帰ってきたご子息が赴任地へ帰って行く。

「遙か鳥雲に」で心情が伝わってきます。

時移り事去る故郷蓬餅

盛雄

正明さん・・・私にとって、今回の「次点」です。

三点

蜃気楼竜宮城の立ち上がる

孤舟

康敏さん・・・蜃気楼に竜宮城が立ち上がると云う壮大なイメージ。

待つといふ豊かな刻や初音聴く

孤舟

盛雄さん・・・初音を待つ詩人の豊かな心。いいですね。

雨の日の雨の初音となりけり

くにお

龍平さん・・・幼時トタン屋根の平屋に住みし頃 屋根を叩き始める雨音 想起 懐かし。

此の句 真意知り度し。

雉鳴くや瀉の静寂を切り裂けり

くにお

ただしげさん・・・雉の鳴き声を上手く表現している。

紀久男・・・切れ字を気にされている様子がありますが、雉鳴いて にされたら如何かと・・・

※康敏さん・・・切字「や」と「けり」の併用はタブーです。↓「雉鳴いて瀉の静寂を切り裂けり」。もし、上五に切字を使うなら二句一章にするべきです。

(例「雉鳴くや日はしろがねのつめたさに 上村占魚」)

尚、今回の出句の中には、他にも切字の使用方法が不適切な句がいくつかありますね。

更の靴矯めつ眇めつ朝うらら

千恵

とみ子さん・・・矯めつ眇めつという言葉でお気に入りの靴とよく分かります。更の靴を履いておでかけのワクワク感も伝わってまいります。

亜也さん・・・モノへの執着も大事。「更」は「新」の方がいいかも。

懐紙より懐紙に移す雛あられ

康敏

恵洲さん・・・雛あられのお裾分け。日本の女の子らしさあふれる優しさ。

吾を見るや鶯の声共に歩す

雅夫

五郎太さん・・・私が歩くのに合わせるように鳴く鶯、下五がいいですね。

ゆたかさん・・・鶯の声とともに歩む表現がいいです

二点

ワイン買いひ娘等妻と雛祭り

忠彦

隆さん・・・女だけの家族の親父としてはワインを友にしたいかも。説明調の感あり。

「娘らとワインで乾杯雛祭り」では。「雛祭り」なら「娘等」を主役に置いてもいいでしょう。

春昼のバーのマテニイのジンは未知

千恵

啓子さん・・・春昼のマテニイ、なかなか都会的でカッコいい絵が感じられます。最近のジンは工夫をして新しいものが出てきていますから、初めてのジンドったのでしょうか。

春霞多摩の流れを遙かにす

國護

康敏さん・・・いつもの多摩川が春霞によって遠くもやっている。

ゆたかさん・・・情景が目には浮かびます

越前の春や廃墟の破砕音

びん

堂哉さん・・・一日も早い復興を願っています、日本のあちこちで地震が絶えません。ますます不気味なことです。

終電の寝息澄みたりおぼろ月

百合子

亜也さん・・・電車自体の擬人化と理解。車内灯を落として車庫で眠る姿を想像。

天魚(あまご) 喰ふ箸の先なる紅き点

啓子

千恵さん・・・天魚の胴体にある可愛い紅き点、気づけば箸の先についてるわ、ほほほって感じですか。

野蒜(のびる) 引きガリリと齧る母のいて

啓子

亜也さん・・・ちよっとした豪快さ。付いた土は皮剥けば取れるということ。

紀久男・・・ガリリを片仮名にしたのが良い。音が聞こえるよう。

壺焼や全き腸のありてこそ

亜也

五郎太さん・・・その通りです。

恵洲さん・・・栄螺の壺焼き。腸(はらわた)がちゃんとあってこそその価値。同感。

夢なのか蜃気楼見た若き日も

けい子

孤舟選者・・・蜃気楼は夢幻(ゆめまぼろし)の世界。若き日もその中に溶け込んで、五郎太さん・・・春先の海で見たのか、心の中で大きな夢を見たのか。若き日々の懐旧は苦く、

甘い。

木目彫(もくめぼり) 小さな雛を仏前に

天牛

隆さん・・・逝きし人とも雛祭りを祝うやさしさ。「仏壇に」としてもよい。

一点

待春の選抜野球釘付けに

紀久男

孤舟選者・・・今年はどうなドラマが繰り広げられることだろう。但し季語「待春の」

↓「春塵の」では。※句会の中でも「待春」は季語として冬の終わりを意味するので、選抜野球と合わせるのはいかがなものかと話題になった。

初花はもすこし先と花芽かな

千恵

五郎太さん・・・今年には桜の開花が遅く、気になります。

春の雪犬は喜び駆け回る

ゆたか

隆さん・・・雪国の犬ではないでしょう。思わぬ雪は犬も人も喜ばず。

フレイルの序列のあなた鳥雲に

びん

びんさん（自句自解）・・・近年フレイルという言葉が新聞などでよく見る。加齢により兆す

精神的身体的機能の切ない虚弱症候群を言うようだ。

そう言えば「フレイル」とは西洋歌舞伎のシエイクスピア作ハムレットの「名言十選」にある台詞で「弱者」の意。「弱き者よ汝の名は女なり・福田恒存訳」 ついでに言うところシエイクスピアと芭蕉は元禄宝永の世に生きてお二人とも72歳で成仏された。

桜散るチルチルミチルの青い鳥

百合子

孤舟選者・・・散る・チル・チル・ミチルの言葉遊びが楽しい。

桃始笑（ももはじめてさく）翔平祝ふ空も蒼

啓子

紀久男・・・大谷の結婚を祝い、ドジャースへの移籍を歓迎するということでしょうか。

新幹線敦賀の海に春の雪

けい子

天牛さん・・・冷たい日本海も新幹線で賑わってめでたい事です。春の雪がきいています。



【次回四月句会（第四金曜日！）、次々回五月吟行のご案内】

四月青葉会・・・今月は**第四金曜日 26日**です！ **（！）注意下さい！！**

☆令和六年四月二十六日**（金）**

13時～16時半

世田谷区役所三軒茶屋支所（茶沢通りに面して）

5階 会議室・しゃれなあど

ご出席の方 当季雑詠5句 ご投句の方 同2句 を目処に お出してください。

締切日 四月二十四日（水）午前中までに 星田宛メール或いはFAXにてお送りください。



☆令和六年五月二十三日**（木）**

恒例の初夏の吟行です。

吟行の場所 港区白金台 自然教育園（港区白金台五・二十一・五 電話：03-3441-7176）

※交通手段 JR山手線目黒駅東口、東急目黒線目黒駅より目黒通りを東へ徒歩約10分

東京メトロ南北線、都営地下鉄三田線白金台駅1番出口より目黒通りを西へ7分
吟行後の句会場所 大田区東五反田 マンション集会所（孤舟選者のご紹介・数回実施）

※吟行集合場所・食事等詳細未定。ご案内は次回会報にて詳細ご連絡致します。



【句会報】

一、三月の青葉会は会場確保の関係で本来の第四木曜日を第三木曜日とした関係で、ご出席者が幾分少なく八名となりました。

ご出句戴きました方々は二十六名、出句数は八十二句でした。選者、孤舟さんのもと、進行はいつもの五郎太さんと和やかに披講も賑やかに進み、結果はご覧のようにとみ子さんが十一点の高得点、続いて孤舟さん、関西から盛雄さんの十点と、十点台が3句となりました。句評、短評も多く頂戴しております。お楽しみください。

二、孤舟選者近詠

喉通る生命の重さ白魚汲む

竜天に象形文字の月と雨

白魚汲む犇めく眼ありにけり

たましひの蠢いてゐる蝌蚪の紐

雪解川デスクトップを溢れ出づ

三、関係者近詠

腹部大動脈瘤破裂 緊急手術受く

生存率五分の生還天高し

搬送先は救命士頼り赤とんぼ

秋冷のT2へ医師走る

特選 退院の一斉メール草の花

襟章の無き襟止まれ赤とんぼ

鮎釣りの膝分け流る甲斐の川

稲架の空ひらりひらりと鷹の凧

絵に動く「種をまく人」秋の館

木の実踏む硬き靴音蛇笏の忌

さらさらとさらさらと今朝芒叢

錆手摺伝ひ伝ひて残る虫

眞希子

全

全

全

全

弘子

全

全

全

全

全

全

秋耕の鎌を手にしてゐて探す

虫すだく和して同ぜぬ声一つ

あぶれ蚊を発止といみじうしたり顔

昏れてひぐらし旅の仕度を急かすかに

スーパームーン見てゐて頬を濡らしけり

妻逝きてより啄木鳥の来ずなりぬ

秋芝居女の一念空回り

また転び妻の溜息身に入みて

リハビリの往きに帰りに赤とんぼ

虎狂(トラキチ)から紅白饅頭十六夜

森の座一月号 選者 横澤放川(日経俳壇選者)

陽充

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

全

※この同人の弘子さん(元・青葉会)は能登のご出身。今回の地震についてお伺いしたところ

親類縁者の皆さまには全員ご無事でした由。お見舞い申し上げます。(紀久男)

怪我抱くは力士の矜持桜満つ

年ごとに増す寂しさや花の下

盛雄

たかし

令和六年四月九日

(了)

